

身近なものから我が街を見直す

—第4学年「被爆建造物から広島市を見直そう」を通して—

柏木俊明

1 はじめに

子ども達は、日々の生活の中で様々な物を見て発見したり、疑問に思ったりする事がある。しかし、多くの場合何気なく過ごしてしまいがちになる。そこで、何かをきっかけにして、自分たちの住んでいる街を見直し、自分たちの住んでいる街について新たに知ることは、社会を見る目を養い、将来への街作りを考えることにつながるであろう。そうしたきっかけを「人やもの」との出会いやかかわりと考え、本実践を行った。

2 テーマについて

今年度の本校の研究テーマ「人やものとのかかわり」は社会科全体にかかわってくることである。そうした「人やもの」を切り口として、子ども達自身にどのような教材を与え、どのような学習過程を組むことが、社会を見る目を育て、高めていくことができるのであろうか。本テーマは、被爆建造物を切り口として、自分たちが住んでいる広島市をもう一度見直し、広島市のこれまでの歩みを考えながら、将来の広島市を考えようとするものである。

広島市の街を見直すことのできる物は、広島市に点在している被爆建造物である。その中には、世界遺産ともなった「原爆ドーム」もある。これらの被爆建造物は、広島市の中心地に多く存在しており、目にすることも多いが、その存在の意味を十分知っているとはまではいかない(表1)。

また、この被爆建造物は広島市が復興していく中で、当初から残していこうとされた物ではなく、戦後、時が経つにつれ、その存在の重要さが指摘されるにつれて保存されるようになった物も多い。被爆建造物を残すという指定は、広島市議会が1990年に「原爆遺跡の保存を求める決議」を採択した。また、原爆ドームは1996年に世界遺産に指定されており、今では平和の象徴として存在することが当然視されている。しかし、この原爆ドームさえも、1966年の広島市議会で存続が議決されるまでは、存廃についても議論をされてきた。さらに、他の被爆建造物についても、保存する方向で進んできているが、平和公園内にあるレストハウスをはじめ、今なお保存の方法など課題も多く、これからの広島市を考えていくにも大切であると考えられる。そこで本テーマに沿って、仮説を次のように設定した。

質1 原爆に関係する建物や記念碑などを知っていますか。	
・原爆ドーム	97%
・平和公園	31%
・原爆資料館	29%
・原爆の子の像	23%
質2 身近にどんなものがありますか。	
・平和公園	6%
・ない	94%

仮説

被爆建物が残されてきた理由を、原爆ドームを例に調べようとする場を設定するならば、原爆に対する広島市の人々の思いに関心を持ち、広島市の戦後のあゆみと平和について追究し、自分たちの広島市を見直すことができるであろう。

研究の視点

1. 身近な被爆建造物を調べ、被爆建造物マップから追究する課題がもてたか。
2. 広島市の歩みを通して広島市を見直すことができたか。

3 単元について

今、20世紀から21世紀へと大きく転換を図ろうとしている。今までの20世紀は、多くの大戦が起き、戦争の世紀とまで言われることがある。

広島市は、国際平和文化都市をめざしている。広島に世界で初めて、原爆が投下され、多くの人々が犠牲となり、なお現在でも多くの人たちが苦しんでいる現状がある。二度とこのような惨禍を招くことがないように、我々は平和を希求し、こうした願いを未来へわたって伝えていく必要がある。こうした平和を願う心は原爆を投下され55年経過し、その心が必要とされつつも、もう一方では、風化が叫ばれている現状がある。そこで、これまで広島市民が平和を希求してきた理由を知り、4年生なりに平和について考える機会をもつことは、自分たち自身がこれからどのように広島市を創り、発展させ、築き上げていかねばならないかを考える基礎となり意義ある単元と考えている。

4 指導目標

- 1 広島市民の平和への思いについて自分なりに感じ取り、自分なりの考えをもつことができるようにする。
- 2 原爆ドームなどの被爆建物を保存し、広島市が平和な都市づくりを目指している理由を理解することができるようにする。
- 3 年表や統計などの資料を読み取りや、人への聞き取りを行い、それらを表現することができるようにする。

5 指導内容と計画15時間

第一次 広島市の被爆建物について知り、身近な被爆建物を調べ、地図にまとめる。(3)
・広島市の被爆建物の存在 ・自分たちの身近な被爆建物
第二次 被爆建物が残されている理由を、原爆ドームを例に調べる。(7)
・原爆や原爆ドームへの思い ・原爆ドームの歴史
・原爆の被害の様子 ・原爆ドームが世界遺産となった理由
第三次 原爆に対する思いや広島市の平和都市づくりについて知り、自分たちの平和に対する 思いをもつ。 (5)
・平和記念資料館，平和公園，原爆ドーム見学
・被爆者の方の思い ・戦後の広島市のまちづくり

6 実践

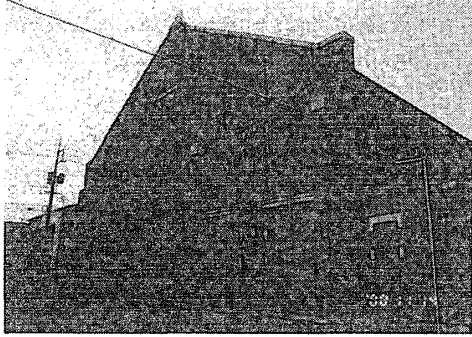
(1) 身近な被爆建造物さがし

子ども達に、被爆建造物の写真（広島大学学校教育学部旧大学図書館〔官立広島師範学校〕、広島陸軍被服支廠、広島陸軍兵器補給廠の一部）を提示し、見たことがあるか尋ねてみた。子ども達の多くは、近くを通っているのもかかわらず、知らなかったという反応が返ってきた。

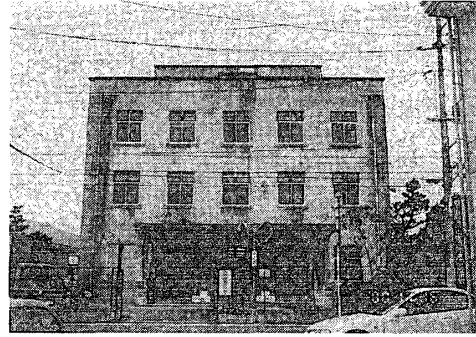
そこで、住んでいる近くや学校などを行き来すときに、こうした被爆建造物はないか調べてみようかと働きかけ、1週間調べ活動の時間をとった。子ども達は家の方に聞いたり本で調べたり、公民館や図書館に行って調べたりして、家の周りにどんな被爆建造物があるか調査してきていた。調べたことは、ワークシートに記入し絵や写真、気づきなど書き込むようにした。



広島陸軍兵器補給廠



広島陸軍被服支廠



広島大学学校教育学部旧大学図書館
〔官立広島師範学校〕

調べたことは、学級全体に紹介すると同時に、広島市の被爆建造物マップを作成した。この地図を作ることで、自分たちの知らないところにこんな所があったのかと、初めて気づくことも多かった。そこで、マップから分かったことと、疑問を子ども達からだし、主な内容を整理した。

分かったこと

- ・中区爆心地から広がるようにある。
- ・広島を中心に多く残されている。
- ・本通りなどの人通りの多い所にもある。
- ・学校にも残されているものがある。
- ・中心から西の方や北（安佐北区）の方は、あまりない。

疑問になったこと

- ・なぜ中心に多いのか。
- ・他に何があるか。
- ・なぜ広島市にあるのか。
- ・なぜ被爆建造物を残しているのか。
- ・原爆や戦争について知りたい。

これらの疑問を解決していくために、原爆ドームを例に取りあげ、多くの子ども達が疑問に思った「なぜこのように被爆建造物が残されていったか」について探っていくこととした。

(2) 原爆ドームはなぜ残されたか

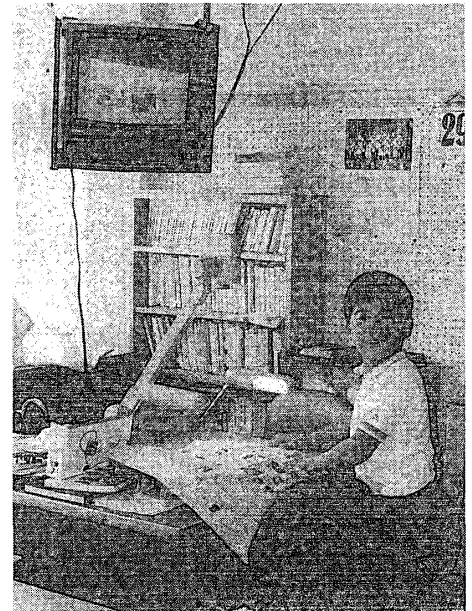
ア 原爆ドームの写真から

原爆ドームは今まで見て知ってはしているが、実際にどのようなものであるかは、じっくり観察することはあまりないようであった。そのため原爆ドームが、今どのようなようになっているか、じっくり写真で見ることにした。

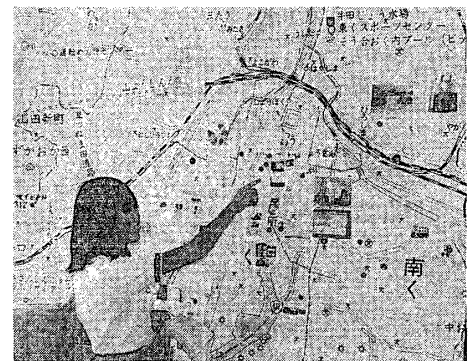
原爆ドームの写真を見て、

- ・鉄骨が出て折れ曲がっている。
- ・壁が倒れそうだ。
- ・窓枠がゆがんでいる。
- ・屋根が落ちて鉄骨だけになっている。
- ・壁が落ちて散乱している。

という事実を見て、原爆はすごさを改めて感じたようだった。



被爆建造物調べの発表



被爆建造物マップ

そこで、原爆ドームはなぜ残されたのか予想を立てた。

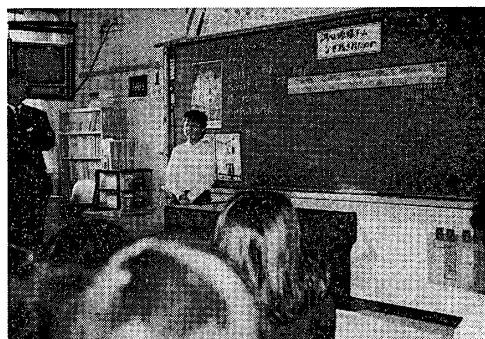
- ・二度と戦争を起こさないため。
- ・原爆の恐ろしさを知ってもらうため。
- ・日本だけでなく世界の人にも知ってもらうため。

という意見が出された。

イ 原爆ドーム存廃問題

子どもたちの意識の中で、原爆ドームは残されてきたことがあたり前のように感じているようであった。そこで、「原爆ドームは、存続はいつ決まったか。」という問いを出した。

戦後10年から20年という意見が多く、1996年（世界遺産が決まった年）という意見もあった。実際に広島市議会が決定した1966年と聞くと、「遅い。」という意見が多かった。



授業の写真

なぜ、このように遅くなったのか、当時の新聞記事（1960年 中国新聞）で調べることにした。

その新聞記事の見出しだけ見せて、「原爆ドームの存廃問題」が起こっていたことを確認した。子どもたちにとって存続していることが、当然と思っていたようで、廃止するというのにびっくりしていたようであった。

そこで、記事の中身を読んで当時の様子を考えた。当時の新聞によれば、「平和のシンボルとして置くべきだ」という意見の他に、「見るたびにイヤになる。」という記事であった。原爆が広島市民に与えた影響は子どもたちの予想以上であったようだ。

その存廃論議の中で、原爆ドームの募金運動が起こったことを子どもたちも調べてきた。その原爆ドームの募金運動の始まりに、楮山ヒロ子さんの日記があることを知らせた。楮山ヒロ子さんが亡くなられてから、原爆ドームの保存のための募金運動が高まり、その高まりの中で、原爆ドームの保存が決まったことや、募金活動は予定の修理の額よりもはるかに多い額が集まったことなどを紹介していった。その後、原爆ドームは大きな修理を2度行い、1996年に世界遺産となった。子どもたちは、

- ・募金活動で原爆ドームを修理したこと。
- ・予定した額より、多くのお金が集まったこと。
- ・日本の各地から募金が集まったこと。

など、原爆ドームについてのこれまでの歩みに驚いていた。

(3) 広島市を見直そう

ア 平和公園、平和記念資料館、原爆ドームの見学

これらの、原爆ドームの歩みから実際に平和公園や平和資料館、原爆ドームを見学することにした。見学することで、原爆についての様子を十分イメージできなかった子どもにとって、平和資料館の見学は具体的なものとの出会いである。本物の様子から伝わってくる事実は、子どもたちの意識の中に、強いインパクトを与えたようである。資料館におられたピースボランティアの方に質問する場面が見られたり、じっくり本物を見てメモする場面がたくさん見られた。この見学を通して、原爆についてより詳しく分かったというだけでなく、なぜ被爆建造物が街の中心に多いかについても、理解することができた。



平和公園見学

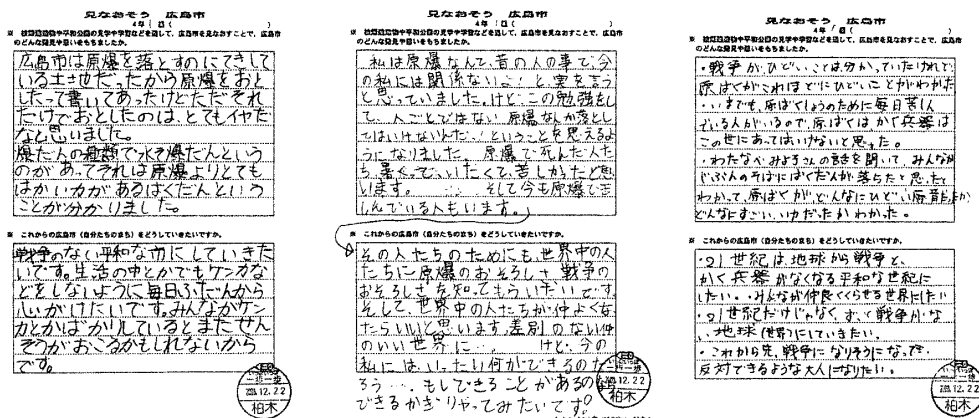
また、この見学では被爆体験者の方にお話を聞く機会を設けた。お話を聞く中で、原爆当時の様子を具体的に聞くことができ、自分たちの生活の中からは考えられないような事実についても、お話を伺うことができた。また、将来を生きていくための子どもたちにとって、原爆を二度と使わないことや平和な世の中を作っていくこととの大切さを話された。

さらに、原爆ドームの見学を行った。子どもたちは、「写真で見るよりずっと壊れそうで、大切にしていけないといけないな。」と話していた。

イ 被爆建造物と広島市

原爆ドームについては「なぜ残されたのだろう。」ということが分かってきた。しかし、被爆建造物がこれまでどのようにして残されてきたかについては、十分ではなかった。そこで、これまで被爆建造物がどのように残されてきたかを広島市の歩みとともに考えた。これらの学習を通して、これからの広島市がどのようにあるべきか、自分なりの考えをもつことができた。

子どもたちの感想



7 成果と課題

視点1. 「身近な被爆建造物を調べ、被爆建造物マップから追究する課題がもてたか。」について

子どもたちは、被爆建造物を紹介した後、家の人に聞いたり、公民館や図書館へ行って調べたりしていた。「近くにこんな所があったよ。」と写真を撮ってきてうれしそうに紹介する子どもや、「自分の近くには無かったけれども、戦争の時に使った防空壕があったよ。」という子どももいた。それぞれが意欲的に調べ、どこに、どんな被爆建造物があるのか興味をもつことができた。

また、これらの被爆建造物調べを発表していく中で、被爆建造物マップを製作したが、広島市に被爆建造物がたくさんあることに驚いていた。マップを作ることで意識していなかった事実が、はっきりと意識化され、マップから様々な課題をもつことができたようである。

視点2. 「広島市の歩みを通して広島市を見直すことができたか。」について

広島市に多くの子どもたちは住んでおり、学校も広島市に存在する。広島市は戦後の復興していく中で、平和を大切に街づくりを行ってきた。その広島市を被爆建造物（原爆ドーム）を通して考えてきたことは、自分たちの街を今までもっていなかった視点から見直すことができたといえる。また、原爆についていろいろ知ることによって、これからの広島市の街づくりなどに関心をもつことができたようである。

しかし、被爆建造物を残すということが政治の面と関わっている点など、4年生の学習としては少し難しい面もあったように感じた。そのために、こうした政治の面を4年生なりに考えやすくできるような支援の工夫が必要であった。

<参考文献> 「ヒロシマの被爆建造物は語る」 被爆建造物調査研究会編 広島平和記念資料館 発行